

大学のグローバル化とKPI策定

吉村宗隆

近年、我が国の大学が直面する課題の1つにグローバル化への対応がある。大学のグローバル化はあくまで大学の自律性を前提として捉えられるべきものであるが、その進展段階には3段階あるものと考えられる。大学のグローバル化の現状はいくつかの指標によって捉えることができ、そこで大学のグローバル化の現状と課題が抽出される。こうした課題を克服し、大学に内在的な改革としてのグローバル化を進めるための一つの方策は効果的なKPIの設定である。有用なKPIを用いることで各大学の実情に応じたグローバル化を進めることができる。

京都アニメーション放火事件における被害者実名報道について ——メディアの報道を検証する——

浮 田 哲

京都アニメーションの放火事件は世界中に大きな衝撃を与えた。事件そのもののインパクトも大きかったが、メディア論的にみると、被害者の報道に際して「実名」にするか「匿名」にするかが今までにないほど大きな議論を呼んだ。被害者遺族の意向を尊重する京都府警に対して実名公表を求めるメディアにはネットを舞台に多くの批判がよせられた。「実名報道」を原則としてきた日本の新聞、テレビはこの事件の報道にどのように対応したのかを考察する。

投資原価の配分方法の選択と最適投資の誘導

森 本 和 義

本稿では、ドイツの管理会計研究者が高く評価するRogersonの1997年の研究成果について探究している。Rogersonの研究では、まず、会計利益が経営者の業績評価指標として用いられている企業実務が注視されている。そして、Rogersonは、経営者報酬が会計利益に基づいている場合に、企業経営者の最適投資を誘導する唯一の投資原価の配分方法が存在することを確認している。Rogersonによれば、その唯一の投資原価の配分方法は年金配分法と呼ばれ、しかも、その唯一の配分方法によって生み出される会計利益が残余利益 (residual income ; RI) であると主張されている。Rogersonの研究成果によれば、株主が年金配分法と会計利益に基づく報酬契約を用いる場合には、どのような会計利益に基づく報酬契約であれ、株主は常に企業経営者を最適投資へと誘導することができる。本稿では、Rogersonの研究成果を探究した上で、年金配分法という原価配分方法が、権限の委譲に起因するモラル・ハザード問題の解決策となりうるかどうかについて考察している。

バドミントンのスポーツ映像解析における 全天球映像活用と可能性

内 田 知 巳

2016年はVR元年といわれている。ヴァーチャルリアリティに関する機器が急速に普及しだし、新たなメディアとして注目を集めている。その中に仮想空間の中に天地水平の全周囲を再現するための360度の全周囲を撮影するカメラが登場してきた。そのカメラで撮影される映像は全天球映像と呼ばれる。全天球映像とは、一方向のみを撮影する通常の映像とは異なり、上下左右全方位を、撮影し合成することによって、撮影地点からの全周囲を視聴することができる映像のことである。

また、東京オリンピックを目前に控え、スポーツ競技の映像分析の技術や研究が発展している。そこで、新たなメディアとして普及しだした全天球映像を用いたスポーツ映像解析で、従来の通常ビデオによる問題点の克服と、全天球映像活用の有用性を実証するために、360度カメラと通常ビデオカメラを用いて、バドミントン競技の撮影と解析の実証実験を行った。その実験手法と、得られた結果により、スポーツ映像解析における360度映像の利点、有用性を検証する。

儒教文化の企業経営における影響について

——竹中工務店の事例を中心に——

玉 置 博 計

現在の竹中工務店は、祖先に普請奉行を持つ竹中家の第14代竹中藤右衛門によって創立された。その会社作りには、幼き頃に寺子屋で学んだ『論語』等の儒教文化の影響が見られる。彼の考える「理想の会社像」は、孔子が追い求めた「理想の国家像」と重なっている所が多いように思われる。

儒教の倫理には、現在にも通じる合理的な示唆が数多く見られるが、その裏には、家族主義等、企業の発展を妨げかねない「負の側面」が潜んでいると指摘される。竹中工務店は数回の人事制度改革によって、その弊害を払拭している。藤右衛門の「仁」への想いが、企業理念として、社是に表され、その第一是の「正道」「信義」「堅実」は、やがて社風となって浸透した経緯を検討する。

授業デザイン枠組としてのCLILの有効性 ―留学生の聴解指導を例に

戎 妙 子

近年、校種を越えて21世紀型能力の育成が注目を集めている。日本語教育の分野もその例外ではない。本稿は、21世紀型能力の育成を図るために、CLIL (Content and Language Integrated Learning : 内容言語統合型学習) の理念を枠組に実施した学部留学生の聴解指導において、CLILが授業デザインの枠組として有効に機能したか否か、学生の自己評価の分析に基づき検討した結果を報告するものである。分析の結果、CLILは授業デザインの枠組として一定の機能を果たしており、有効性を認めることができた。

世界文化遺産「百舌鳥・古市古墳群」出現期の原風景

坪井恒彦

日本の英語教育と今後
——留学生に日本語を教えて見えてきたこと——

深 田 章 子・大 矢 智 子

大学野球における人間教育

朝 西 知 徳

エラ・ショハット／ロバート・スタム
『支配と抵抗の映像文化：西洋中心主義と他者を考える』

片岡恵美